

冷蔵貯蔵で安定出荷

ニンジン 食味重視し品種選定

ニンジン冷蔵保管し、通年安定出荷を果たし、年間一本の値決めで経営規模の拡大につなげている農業経営体がある。熊本県菊陽町の眞弓農園だ。経営主の眞弓一保さん（61）と、農業コンサルタント会社、轟（宮崎市）の森田英勤社長が、昨年末に土

同町はニンジン産地で、同農園の耕地面積は借地も含め100ヘクタール。ニンジンは冬春合わせて17畝栽培する。労働力は家族3人、雇用は臨時を含めて12人だ。

冬作、春作を連作する場合もあり、クローラートラクターで冬ニンジンは深さ50センチ、春ニンジンは70センチ、プラウで土壌を反転したり、土壌を休ませたり、緑肥作物を入れたり、水稲を入れたりし、連作障害を減らし省力化と安定収穫につなげている。緑肥のギニアグラス「ソイルグリーン」は、土壌の物理性を改良しネコブセンチュウの抑制効果がある。

ニンジンは冬作が11〜3月、春作が4〜7月に収穫する。ほぼ1年を通じた栽培で、品種は冬が3品種、春は2品種を作る。食味が良い品種は一般に窒素が多いと裂根しやすく栽培しにくい。栽培しにくくても味が良い品種を選定。耐病性より良食味品種を重視する。毎年土壌診断し、肥料は味を良くするに資する資材を選んで

づくり推進フォーラムが東京都内で開いたシンポジウムで、事例発表した。水稲も含めた輪作、緑肥の導入、反転耕を組み合わせ、連作障害を回避しつつ、食味重視の品種選定と施肥で成果を挙げている。（北條雅巳）

いる。「開拓丸」「めぐみ10」など、「有機」「微生物」「土壌活力強化」「植物活力」などを強調した資材を使い、有機質を主体に施肥する。窒素成分は10〜8割。葉面肥、一部BT剤を散布する。深い散布もする。書虫対策としては、発生メダカを予測し、畑への侵入を防ぐため、臭いがある特殊な生育安定肥料（轟MC）を使う。

市場価格の倍で契約

熊本県菊陽町 眞弓農園

耕し排水は良いので多雨でも水はたまりず病害発生はほとんどない。一部化学肥料を使うが、ほぼ有機栽培なので除草に手間が掛かるのが課題だ。天候によって毎年収量は変化するが、安定するよう努めている。2013年度の冬作は796トン、春作は790トンで337トンだった。販売先は直接販売が7割、市場販売が2割、加工販売が1割だ。

収穫したニンジンはコンテナ



土壌物理性を良くするため深耕に力を入れている①、眞弓農園のニンジン冷蔵保管庫（轟提供）

品質を2カ月維持／消費者から高評価

の内側にポリエチレン袋を入れて詰め、湿度を保ち、急速冷却し氷点下0.5度で50リットル収容できる冷蔵庫に貯蔵する。この冷蔵貯蔵の技術が要で、工夫をし低温を保つようにしている。この手法はマニュアル化している。

出荷時に洗浄、選別、個袋包装し段ボール箱に詰める。

冷蔵貯蔵で長期にわたって鮮度を保持し、高品質のニンジンを出荷できる。注文に応じて出荷できる。注文に際しては商品価値を維持する体制を整えた。冷蔵貯蔵で、2カ月間は商品価値を維持する技術を確認した。春ニンジンでも10月まで出荷できる。昨年は7月以降の注文が多く、8月中旬に出荷を終了した。

出荷先とは連年契約をし、しかも通年同一価格で出荷している。直接販売なので市場価格に影響されず、市場の2倍ぐらいの安定価格で販売できる。収入が予測できるので、設備投資がしやすいのも利点。注文が増えているため借地でニンジンの栽培面積を増やしている。

インターネット販売のオイシックス（東京都品川区）で、14年に「農家オブザイヤー」の最高賞を受けた。同賞は消費者が投票などして評価して選ぶ。12年度のニンジン販売は602トン、7400万円、13年度は5997トン、8000万円と見ている。